

「富宇治にいたりて、鸞輿しほしとゞめさせて、河つらなながめて、おほんよませ給入る。

ものゝぶよ此橋板のたひらけくかよひてつかへ萬代までに

是をつた人等七たびつたひ上る。

「文 鸞輿を宇治にとゞめさせて、しほしながめさせたまふ。おほん打出させたまへり。

ものゝ夫よ此はし板のたひらけくかよひてつかへ万代までに

是をつたはせて、つた人等吹しらへ奏す。

「冊 宇治にいたりてしほしとゞめさせて御制よませたまへり。

もの夫よ此橋いたのたひらけくかよひてつかへ万代までに

是をつた人等七たびかへしてつたひ上る。

宇治＝現在の京都府宇治市付近、平安京の東南にあたる。和歌では「宇治川」「宇治橋」「宇治山」

の形でよくよまれた。(中略)宇治が山城から大和へ向かう要衝になったのは、大化二年(六四六)に

僧道登によって橋が架けられたことも大きなかわりを持っている。(中略)「憂し」というイメージ

を持ち続けた宇治は、『源氏物語』(宇治十帖)の舞台になったこともあって、平安時代末期から中世

にかけて幽玄妖艶の雰囲気をもたせて和歌によくよまれた(片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』)。

鸞輿＝天皇の御輿。鸞鳥の声を象徴して鈴がついていた。「鸞鳥」＝中国の想像上の鳥。形は鶏に似て、

羽の色は赤色に種々の色をまじえ、声は五音にあたるという(日国大)。「爾其閑水難留、鸞輿晏駕」

(続日本紀・天平勝宝八年五月丙子)、「鸞輿 ランヨ文選註天子駕」(書言字考節用集)。

河づら＝川の表面。歌語（日葡辞書）。「河面とかけり。川のおもて也」（和歌八重垣・五）。

おほん＝御製。

たひらけく＝穏やかである。「やすみしし わご大君は たひらけく 長くいまして 豊神酒まつる」

（続日本紀・天平十五年五月）「海原の 畏き道を 島伝ひ い漕ぎ渡りて あり廻り 我が来るまで

に 平けく 親はいまさね」（万葉20・408・家持）。「起伏をなくす、打ち鎮める」という含意をこ

こまで読み取るか。

万代までに＝「吉野川いはと柏と常磐なす吾は通はむよろづよまでに」（万葉1134）

うた人＝雅楽寮の役人、あるいは単なる歌手。「雅楽寮（うた）りょう（…歌師）（うたのし）」（官

職要解）「雅楽寮・歌師四人、歌人三十人、歌女二百人」（令義解）。

七たび＝七回、あるいは多くの回数。

「富網代の波はけふ見ねど、千代ノノと鳴鳥は河洲に群るをとて、又御かはらけめす。薬子れいに撃

まいらす。所につけてよめとおほせたつば。薬子先よむ。

朝日山にほへる空はまきのふにて衣手なむし手治の川波

と申せぬ、河風はすすしへこそ吹けとて、打めませたまふ。

「冊」「網代の波はたねぬ、けふくんに千代ノノと鳴鳥は河洲に群るを」とて、又御かはらけめす。

薬（薬）子れいにびんげ物まゐるゑ。「歌よめ」とのうたをまゐるじ。

朝日山にほ入る空はきのふにて衣手さむし宇治の川波

「河風はすゞしきを」と打咲せたまへり。

網代＝川に杭を並べ打ち、そこに簀をわたして魚を取る仕掛け。「ものぶの八十宇治川の網代木

にいざよふ波のゆくへ知らずも」(万葉三・巻・人麿)「網代木に堰るるも、漏てゆくには、さり

げなく流るるを面田く見て、さへ行辺しらすもとは感する也」(檜の杣・三上)

千代ノノと鳴鳥＝千鳥の鳴き声を表わす語(日国大)。「我君をかそへあげてや浜千鳥千世千世と

いふ声のみのする」(言継集)(片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』)

おんげ物まるる＝お酌をする。

朝日山＝山城国の歌枕。今の京都府宇治市。宇治川の北岸にあるので・・・「宇治の川霧」を詠み

込んだり、「朝日」が「照る」という表現を前提にして・・・紅葉を詠むことが多かった。・・・また「朝

日」の連想から、「千代ぶべき君が光を待ちそへてけしきことなる朝日山かな」(隆信集)のよう

に賀の歌によみ込まれることもあった。(片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』)

にほ入る＝照り輝く

寒し＝万葉では秋にも使用(3845)。

すずし＝平城天皇の退位は大和四年夏四月讓位(日本逸史・日本春秋・本朝通紀)。冬十一月平城

宮を造賀。十二月遷る(日本逸史)。本朝通紀十四では、十一月に遷る。

「富」左中将藤原の惟成よむ。

君がけふ朝川わたるよど瀬なく我はつかへん世をうちならで

兵部太輔橘の三継よむ。

妹に似る花としいへばとく来ても見てまし物を岸の山振

それは橘の小鳥が崎ならずや。飛鳥の故さとの草香部の太子の宮居ありし所よとおほせたまふ。猶多か

りしかど忘れたり。

「冊」左中将惟成よむ。

君がけふあさ川わたるよど瀬なく吾はつかへん世をうちならで

兵部太輔橘の三陰もよんだい

妹にゝる花としいへばとくきても見てましものを岸の山振

「それは橘の小鳥がさきならずや。飛鳥の故さとの草香部の太子の宮ならずや」とぞ。

尚多かりしかどもらうつ。

左中将藤原の惟成「次の登場する橘三継とともに実在が確認できない。

君がけふ」。「佐保川を朝川渡り」(万葉集)。「宇治川はよどせなからし」(万葉集)。「大君に

吾は仕へむ」(万葉集)。「定なき世を宇治川の渚の瀬」(続千載巻16)。

世をうちならで」世の中を嫌だと思わないで。「宇治」に「憂し」を掛ける。「わが庵は都のたつみ

しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」(喜撰・古今序・83・百人一首)

兵部大輔〓兵部省の次官。

妹に似るゝ〓「妹に似る草と見しより吾がしめし野への山吹誰か手折りし」(万葉497)

橘の小鳥が崎〓「今もかも咲き匂ふらむ橘の小鳥の崎の山吹の花」(古今・春下)。小鳥が崎は宇治

橋の北西。秋成は賀茂真淵の説に従って、飛鳥説を採る。「山吹の花は流に沿て咲よ。橘の小鳥が崎も。

同じ飛鳥の郷に在へし」(金砂一)。

草香部の太子〓天武天皇の皇子。母は持統天皇。文武・元正天皇の父。壬申の乱に従い、天武天皇一

〇年皇太子となつたが、病死。(日国大)。万葉197「日並皇子尊の殯宮の時に、柿本人麻呂が作る歌

一首」(飯倉)

「富奈良坂にて御ゆふげまゐる。この手がし葉はいつれとよはせ給。それは二おもてにて、心ねぢけた

る人にたとへし忌こと也。御供つかふまつる田達。いかで二おもならんと申。よしとのたまひて、古宮

に(ぞ)夜に入て入せたまひぬ。

「文奈良坂にて夕みけまゐる。薬子御だいまいる。」「このてがし葉は」などと問せたまふ。「それはね

ぢけ人に(ぞ)。直々しきには。いかで」と申す。「よし」とみ言のらせて、古宮に夜に入て入せたま

ひぬ。

「田奈良坂にて御夕げまゐる。」「この手がし葉はいつれ」とよはせたまへば、「それは倭けたる人等に

て、詔言なり。今つかふまつる田たち。いかで二面ならむを」と(ふつひ)のたまひて、古宮にはそ

の夜(そ夜に) 入せ給ふ。

奈良坂＝山城と大和の国境

「この手がし葉＝」奈良山の児手柏の両面にかにもかくにもこび人のもと」(万葉卷十六・388)。どのような木か諸説あるが、『能因歌枕』『奥義抄』『和歌童蒙抄』『袖中抄』(、秋成は「側柏」という「叢木」との説を唱える(金砂四))。『児手柏とかけり。此児の手に似る柏也。なら山に読り。こつらおもておなじやつにて風吹はつらおもてひるかへる物也。よつて万葉に…ねちけ人かもと読り。人の表裏あるにたとへていふ。ねちけ人とは佞人をいふ。なほこのてかしはのこと説おほしといへとも略之」(和

歌八重垣)

「おもて＝両面が青く表裏の区別がつかないからか、表裏のある人間の二心に喩える。

即こつ＝思ひ言葉。

古宮＝以前の内裏。

「富あした、御簾かゝげさせて、見はるかさせたまへり。東は春日・高圓・三輪山、みんなみは鷹むち山をかぎり、西は葛城やたかまの山・生駒ふた神の峯々、青牆なせり。むべも開初より宮居こゝと定めたまひしを、せんだいのいかさまにおほして、北に遷らせ給しと、ひとりこたせ給ふ。北は元明・元正・聖武の御墓立並びたまひたりと申せば、杳にふし拌みしたまへり。大寺の甍たかく、層塔数をかぞへさせ給。城市の家ども、また今の都にうつりはてねば、故さとんもあらぬたすまひ也。

「文あした、御簾かゞげさせて、見はるかせたまへば、東は、春日・高田・三輪山、みんなみに鷹むち山をかぎりたり。西は、かつら木・たかま・いこま、ふたかみの峰々、青牆なせり。むべも開初より宮せうろとえらび定めたまふを、先だいのいかさまにおぼしめせばかと、ひとりごたせぬ。北に、元明・元正・聖武の御はか立ならぶと聞し召て、はるかに伏拝ませたまふ。大寺の薨たかく、層塔数をかすろへさせぬ。城市の家ごもん、いまだ今の帝都にうつりはてねば、故さごんもあらず。

「西あした御簾かゞげさせて見はるかせたまへば、東は春日・高田・三和山、みんなみは高むち山をかぎりて、西は葛木・たかんまの山・猪こま・二神の峰々、青牆なせり。」うべも開初より宮居ごと定たまひしを、せんだいのいかさまにおぼしめして北に遷らせたまひし」と獨りごたせたまへり。「北は元明・元正・聖武のみはかの立並びさせたまへり」と、杳にふし拝みたまへり。大寺の薨たかく、層塔の数々をかぞへたまふ。城市の家居ごもん又今の都にうつりはてねば、故さごんもあらず。

春日＝今の奈良県奈良市春日野町、奈良市街の東方の丘陵地、春日山は三笠山・若草山などを含む春日神社の背後の山の総称。…『万葉集』には春の露や秋の紅葉など四季の風物がよまれているが、平安時代には、…春の若菜を詠むことが特に多かった（『歌枕歌』とは辞典）。

高田＝今の奈良市白毫寺高田町。…「秋」をはじめとして「露」「雁」「月」などの秋の景物がよくよみ込まれた。…いつぼつ「露」や「桜」をよみ込んだ春の歌もあるが、いずれにしてもすでに万葉歌によまれている素材を継承したもので、万葉風を感じさせる歌枕として用いられたのである（『歌枕歌』とは辞典）。

三輪山＝大和国 今の奈良県桜井市三輪 三輪山は山全体を御神体とする大神（「おおみわ」または「おつつわ」）神社で有名 上代には…大和平野のどこからでも見えるこの山に対する畏怖と敬愛と信仰の対象としてよまれていた（『歌枕歌ことば辞典』）三輪山のほとりで出家後玄奘が隠棲。「三輪川の清き流れにすすぎてし衣の袖をまたはげがさじ」（発心集）。

鷹むち山＝奈良平野の南 高取町の後ろにそびえる。

かつら木＝カツラキと読む。カツラギと読むのは不可。今の奈良県大和高田市・御所市・五條市の西側（『歌枕歌ことば辞典』）。「明日香川黄葉流る葛城の山の木の葉は今し散るらし」（万葉2210）「春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしぞ思ふ」（万葉2452）。

たかんまの山＝奈良県御所市高天。「葛城の高間のかや野早知りて標指さましを今ぞ悔しき」（万葉1337）。「たかまの山」は金剛山地の葛城山の別称。桜の名所。「葛城や高間の山に夜夜」とに立つ雲も」（雨月・蛇性の姪）（日国大）。

生駒＝今の奈良県生駒郡生駒町。古来大和国から河内国に通じる交通路にあたっていたため、「妹がりと馬に鞍おき射駒山つち越え来れば紅葉散りつつ」（万葉2201）のよつと、生駒山を越えて「妹」に逢いに行くという歌がみえる（『歌枕歌ことば辞典』）。

ふた神＝奈良県北葛城郡の当麻寺の背後の山で、山頂が二峯に分かれる。大津皇子が埋葬される。「うつせみの人なる我や明日よりは一上山を弟（いろせ）と我が見む」（万葉・88）（『歌枕歌ことば辞典』）

青牆＝連山に囲まれた様を、青い垣根に喩えた。国ほめに用いる慣用語。「やすみしし わが大君の

高知らず 吉野の宮は たたなづく 青垣「もつ」(万葉923)

元明＝第四十三代天皇。奈良市奈保山東陵。地図あり。

元正＝第四十四代天皇。奈良市奈保山西陵。地図あり。

聖武＝第四十五代天皇。奈良市佐保山南陵。地図あり。

城市＝市内。

故さと＝古都。

「富東大寺の毘盧言那佛拜まんとて、先出させ給、見上させたまひて、思ふに過し御かたち也。西の国のはてに生れて、此陸奥のこがね花に光そへさせ給ふとぞ。いぶかしくおほせたまへば、近く参りたる

法師が申す。是は華嚴と申御経にとかせし御かたち也。如来のへん化、天にあらせねば虚空にせはだかり、又芥子の中にも所えさするよしに申たり。肖像はこゝにも渡せし。御足の裏に開元の年號あるが、三たびの御つつし姿にて、五尺に過させしをまこととはたのみ奉ると申。露御こたへなくて、たゞたがはせて、物いひたまはず。此御本じやつこそたふとけね。薬子・仲成等、あしくためんとするには、御烏帽子かたぶけてのみおはすがいとほしき。

「文東大寺の毘盧言那佛拜まんとて、いそぎ出させたまふ。見上させて、「思ふに過しみかたち也。西のはての国につまれて、この陸奥山の黄金花に光そへさせしよ」と、御戯のたまふ。ちかくまゐりし法師の申す。」「是は華嚴と申御経にとかせしみかたち也。如来のへんべん、大にあらせば虚空にせはだかり、

ひぢめては芥子の中に所えさせたりと申す。まこと百像はこゝにもわたしたる中に、御足のつらに開元のとしを鑿らせしが、倭国にて三たびの御かたち也。五尺にわづかに過させしよとをろがみたいまつる「とや」。露つたがひたまはぬ御ほんじやつにて、御烏帽子かたづけさせたまふ。かく直くましまするを、薬子・仲成等、あしくためんとするこそ、いとほしけれ。

「冊 仰ぎ見たまひて、先出させたまひ、先出たまひ、仰ぎ見たまひて、「思ふに過し御かたち也。にし
の國に生れて、此みちのく まんとて、先出させたまひき。」思ふに過し御かたち也。西の國に生れて、
このみちのく山のこがね花に光そへさせ給ふ也。いぶかし」とおほせたまへば、参りあひたる法師が云
。是は華嚴經と申にしろせし也。「御」ト改）かたち、如来のへん化、天に在せては、虚空にせば
だかり、又ひそみては、芥子の中に取得たまへりとぞ。丈六をまことの御姿とは申せど、まことの肖像
と申は、御めなつらに開元の年号有が三たびの御つつにて、五尺

毘盧舎那佛＝東大寺の大仏、梵語 *varāna* の音訳。Rocana は光明。Var が付くと、太陽の意になる。
密教の教主の名。「唐二翻シテ大日遍照下曰フ。又釈尊ノ一称」（書言字考節用集三）。大和名所図会
では、朝野群載を引いて、其の高さ五丈二尺五寸と伝える。

此陸奥のこがね花に光そへさせ給ふとぞ＝天平二十一年、陸奥国で初めて黄金が産出。大仏造営のた
め献上された。「天皇の御代采えむと東なる陸奥山に金花咲く」（万葉 497）

いぶかし＝不審である。「奈良の造営の美観にもまさりて、東大寺の毘盧舎那仏、五丈余の大像をつ
くりて、殿堂は雲につき入はかりなり。此時陸奥山に黄金出て、此費をつくのひつとなり。ちらは日

本はもとより仏国なり。達磨 善導の、有を棄 無に帰在(せ)よ、と云しは、此始てわたりしに大に
たかへり。」(胆大小心録158)

是は華嚴と申御経にとかせし御かたち也。『大光明を放つて十方を照らす』(『旧華嚴経』毘盧舎那

仏品第二)

如来=仏の尊号。

せはだかり=いっばいに広がる

芥子=カラシナの種子。その粉末を薬用とする。また、煩惱を調伏する力があるとし、護摩をたくの
にこれを加えて用いた。

開元=「開眼」の当て字。

二たびの御うつし姿=丈六像・半丈六像・大仏像の三種の尊像があること。「釈尊は天眞身の長一丈
六尺にうまれ得させしかば其長に造るを等仏身と申して、そのかみは専ら作りしと也。又華嚴経に毘盧
遮那仏と申して、身の長壽に入るばかりに拝まれたまふと云ふ事によりて、此大像はつくらせ給ひし也。

又何がしの経には、一寸八分に拜まれしとて、しかも造る習ひありとぞ。虚空に満ち、芥子の中にも入
らせたまふとも聞く。信心の感得によりて、変化自在に出現ましませりと云ふ。字はぬ道はたださる事
にて思ひ止みぬべし。」(遠駝延五登 金砂九)。

五尺=約一メートル五十センチ。 あしくためんとする=ねじまげる。 転じて、悪しき方向に向けよ

ついでに。

追加○三たびの御うつし姿〓丈六像（観仏三昧海経第一）、半丈六（八尺・観無量寿経）、大仏像に大別される。（全集）八尺は、釈迦の身の長との伝えあり。それが座像か立像かで解釈が分かれる（日国大）。

○五尺〓木像五尺に初めて刻んだ説（増一阿含経・卷二十八）（全集）